

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 302



1997 JANUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成9年度から年会費が1万円になります

H A Jの通常会員の「年会費」が、平成9年度（平成9年4月1日～平成10年3月31日）分から1万円となります。

これは平成6年5月に開催された理事会において年会費の改定が検討された過程で、当時6千円から1万円に改定するにあたり、段階的に8千円を経て平成9年度から1万円と決定されたものであります。皆様のご理解をお願い致します。

年会費は前金制となっておりますので、6月30日までに納入をお願いします。

ニンチン・カンサ募集

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサ（7,206m）です。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1997年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度(隊は成立しています)
3. 負 担 金:80万円
4. 切 り 定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

地図と図書の販売

1. 地図(いずれも中文1枚1,500円 送料込み)
珠穆朗瑪峰:10万分の一(東はマカルーから、西はチョー・オユーまで)
喬戈里峰:10万分の一(東はガッシャーブルムIから、西はクラウン、チリンまで)
公格爾山-慕士塔格:10万分の一(コングールとムスターグ・アタである)
2. 地図(いずれも1枚2000円 送料込み)
青藏高原山峰図 縮尺1:2,500,000 中・英文あり
中国山峰一覽図 縮尺1:5,500,000
3. 図書
中国登山指南(4,500円+送料340円) 中文
雪域神山(6,000円+送料700円) 写真集。

表紙写真

ギルギットからジープでインダス川左岸をくだり、バグロット谷へ入る。早朝にギルギットを出発すれば、1日でヒナルチェのベースキャンプへ入る事も可能だ。黎明のラカポシ、残照のディラン、茜色に染まる山々が美しい所である。

(岩崎 洋)

ヒマラヤ No.302

- | | |
|-----------------------------------|------|
| 1. カラコルムの氷河(3) | 井上重治 |
| 9. 中高年? ヒマラヤ流れ旅(10) | |
| インド(2) ガンゴトリを巡る(1) | 阿部 淳 |
| 13. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 | |
| 15. 続・現代のヒマラヤ志向とは(アンケート調査の分析) | |
| 20. 小カラコルムからパミールへ(1) | 岩崎 洋 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

カラコルムの氷河(3)

井上重治

前回（ヒマラヤNo.283, 284）に発表した以後に行ったカラコルム・トレックのなかで、カラコルムの氷河に関する興味ある体験と知見が得られたのでここに整理して報告する。

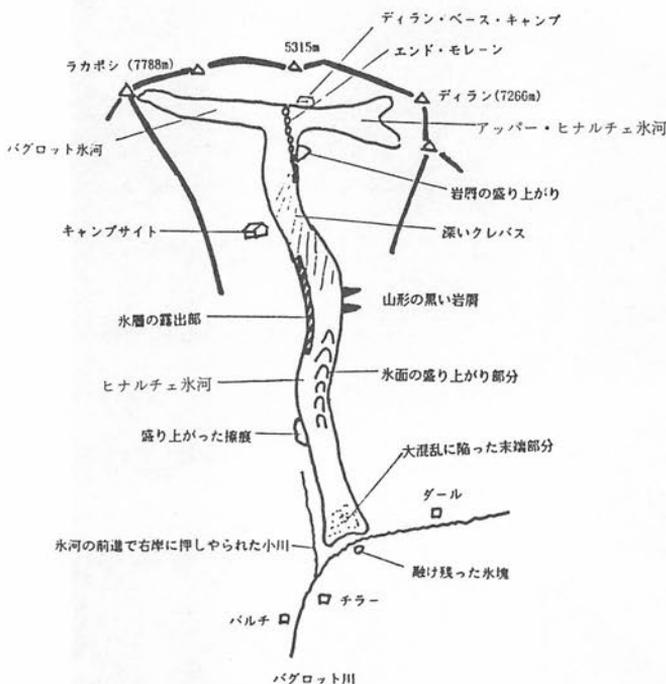
1. ヒナルチェ氷河

ヒナルチェ氷河はラカポシ（7788m）とディラン（7257m）の南面に源を発する二つの氷河、即ち東へ流れるバグロット氷河（長さ、7.5キロ）と西へ流れるアッパー・ヒナルチェ氷河（長さ、約5キロ）が正面衝突し、それから90度南へ折れてヒナルチェ氷河（長さ、約10キロ）としてバグロット谷に注ぐ中規模の氷河である。1996年7月、このヒナルチェ氷河を通過してディラン・ベース・キャンプへ行くことを計画したが、6月初めの長雨による土石流でモレーンの急崖を下る道が完全に崩壊しており、途中から引き返すはめになった。

このため、ヒナルチェ氷河の上流部までは行けなかったが、3500mのモレーンのキャンプからディラン・ベース・キャンプまでは観察できた。

その概略はスケッチに示したが、両氷河の合流点ではラカポシから流れるバグロット氷河の方がディランから流れるアッパー・ヒナルチェ氷河よりも勢いよく、両氷河の中間にできているモレーンはディラン側に押されて、途中からヒナルチェ氷河の左岸に押し上げられていた。氷河の表面の高さも明らかにバグロット氷河の方が高く、あたかもアッパー・ヒナルチェ氷河の上ののしかかるような形になっていた。この両氷河の衝突地点ではさぞかし氷がたくさん割れているだろうと想像したが、不思議なことに合流点付近にはあまりクレバスが見えず（ただし近くで観察していないので正確なことは分からないが）、両氷河が合体してしばらく下ったあたりから、深いクレバスが斜めに広がっていた。ちょうど鋭い包丁で豆腐を斜めに切り、さらにそれと直角方向にもう一度切り刻んだような見事な割れ口をしていた。特にアイスフォールができるような急傾斜でもないのに、こんなに深いクレバスが無数にできている氷河は珍しい。このクレバスの形成にはどうも両氷河の正面衝突が影響しているように思えてならない。クレバスの方向は通常真ん中では流れに直角方向、側端では斜めに走るといわれているが、このヒナルチェ氷河ではクレバス全体が斜めに走っており、明らかに流れる方向は右岸から左岸に向かっている。

しかし、私が最も興味をひかれたのは、下流の動きである。中流から下流にかけて、ヒナルチェ



▲ヒナルチェ氷河概観図

氷河はゆるやかに左へカーブしているが、写真に示すように、明らかに中流部より下流部の氷の表面が左岸に近いところで盛り上がり、古いモレーンの肌黒い山形をした土砂が堆積していた。このことは、かつて氷河の圧力で脇に押し出されて停滞氷になった大きな黒い氷塔が二個、ここに乗り上げていたことを示している。氷が融けて表面を覆っていた黒い土砂がそのままの形で残ったのである。この黒い氷塔跡の下流にはまだ大きく盛り上がったまま黒い氷のブロックがいくつか散見された。さらにその下流では、氷河は若干右にカーブするが、そこでは右岸の一部にやはり盛り上がった氷河の擦痕が見られた。

ヒナルチェ氷河では実はもう一つ驚かされたことがある。ほぼ垂直に断ち切られたサイド・モレーンがちょうど途切れた場所が一か所3400m付近に見つかり、そこを抜けてヒナルチェ氷河の右岸に直接接近することができた。そうすると、写真に見られるように、高さ30mはあろうかと思われる剥き出しの氷の層が見渡すかぎり続いているのである。ちょうどトコロテンを押し出したような氷

層が数百米くらいは続いている。氷河の氷はモレーンないし岩壁と直接接しているのが普通で、このようにモレーンと10mも離れて長い氷層が剥き出しになることは珍しい。この氷層の一部は崩れていたが、大部分は無傷のままで流れていた。明らかにここでは氷河の側面の圧力が右岸から離れて左岸へ向かっていることを示している。実はこの隙間を利用してディラン・ベース・キャンプまで行くことを考えたが、モレーン側からは絶えず落石の白煙があがり、氷河側からも氷の倒壊の危険性があった。なによりも隙間の底には黒光りした氷がびっしりと詰められていて、アイゼンなしにはとても歩ける状態ではなかった。

これらの事実を総合すると、最近ヒナルチェ氷河では大きな変動があり、左へカーブしている中流から下流にかけて左岸に異常な氷の圧力が動き、大きな氷の波が押し寄せると同時に複数個の巨大な氷塔を押し上げた。この大波の力は現在さらに下流へ移って、氷河全体を押し上げ、一部はカーブした右岸のモレーンにまで達している。ここまで推理してくると、このヒナルチェ氷河は氷河の



写真1・満月のヒナルチェ氷河（背後はディラン山稜）深いクレバスが斜めに走っている。

写真2・ヒナルチェ氷河の左岸モレーンに刻まれた黒い影。二つの巨大な黒い氷塔が融けた跡と推定される。



写真3・ヒナルチェ氷河の氷面。左の中流部より右の下流部の方が氷面が高く盛り上がり、表面が荒れている。

異常流動として知られている「サージ」現象が現在進行中であると考えてもおかしくない。そこで、同行したバグロット谷のポーターに「最近ヒナルチェ氷河で異常な動きはなかったか」と尋ねてみた。そうすると、私が予想した以上の興味ある返事が返ってきた。それは長い間の沈黙を破って、昨年からのヒナルチェ氷河が前進を始めたというのである。20日間に約40mというから、1日あたり2mの速度で氷河末端が押し出されてきて、とうとうバグロット川をせき止めてしまったという。このため小さな氷河湖ができ、それが決壊して洪水を引き起こした。こんなことが、昨年三ヶ月間に三回も起こったという。幸い人的被害はなかったという。今年になってもまだ氷河の前進は収まっていないが、氷河湖の形成には至っていない。その代わりに、氷河の舌端が今度はバグロット谷の下流へ向かって押し出されてきて、バグロット川へ流れこむ小川の流路を山わきに押しやってしまったという。

通常カラコルムやヒマラヤの氷河の末端は厚い土砂で覆われるか、鋭い氷の断崖になっている。

ところが、ヒナルチェ氷河の末端は黒い氷が激しく動いており、2日前に安心して通ったルートがもう氷が剥き出しになって通れなくなった箇所が少なくない。まるでくもくと土を盛り上げるモグラのような激しい氷の動きであった。氷河末端でさらに二つのことを発見した。一つは氷河の擦痕のついた岩石が表に出ていたこと、もう一つは盛り上がった土砂の表面が塩をふいたように真っ白になっていたことである。白い粉は、氷河で削られた岩屑を含んだ濁水が底からあふれだして表面で乾燥してできたものである。この二つの事実は氷河末端が天地をひっくりかえす大動乱に陥っていることを示している。

ヒナルチェ氷河の末端に立ってバグロット谷を見下ろすと、川の水量に比べて、川幅が異常に広いことに気がついた。このことは過去に大規模な洪水があって、川岸の土砂を大量にさらっていったことを如実に示している。恐らく過去にヒナルチェ氷河の前進によって大きな氷河湖ができ、それが決壊したために広い川原ができたものと想像した。そこで、昔のヒナルチェ氷河の状態につい



写真4・ヒナルチェ氷河に見られた高さ約30m、長さ数百mの裸の氷層

で尋ねると、「70年かもっと前に大きく膨れ上がってバグロット谷を埋めてしまった。その後は静かで、1980年頃に一度村まで200mくらい近づいたが、再び後退した」という。私の想像があたって大満足であった。恐らく70年前に大洪水があったものと思われる。これまでヒナルチェ氷河に関する報告は私の知る限りでは皆無である。この人に知られざる氷河の異常な行動は、氷河研究者にとっては恰好の題材になることは間違いない。

ところで、ヒナルチェ氷河の動きがもろに影響するバグロット村の人達はただ腕をこまねいていたわけではない。彼らはこのヒナルチェ氷河の氷を商売に利用することを考えた。そこで着目したのが、ギルギットの夏の暑さと電力不足で氷が製造できないことであった。そして、毎朝ギルギットまで氷河の氷をジープで運んで販売することを始めた。元手は運搬賃だけである。結果としてこの商売は大当たりであった。われわれ日本人も、この氷河の水であれば伝染病の心配をせずに、シャルバット（果汁と砂糖を煮詰めて造った清涼飲料）などのかき水を安心して食べることができるとい

うものである。

2. パスー氷河のその後

パスー氷河はカラコルム山脈の西端に位置するバツラ山群を流れる氷河で、カラコルム・ハイウェーから最もよく眺められる氷河でもある。フンザからハイウェーを北上してパスー手前にさしかかると、二箇所ほどこの氷河がよく見える場所がある。さらにパスー村に着いてから30分も歩けば、大きな氷河湖を抱えたこの氷河の舌端まで行くことができる。私は1993年4月に一度このパスー氷河を訪れて、巨大な氷塔の存在からサージ様の異常な流動現象があることを確定して、すでにヒマラヤNo.284に報告した。その後1995年7月になって、地元のガイドからパスー氷河におかしな動きがあるとの情報が寄せられた。1994年頃より、3200mのパスーガル付近で氷が50mくらい盛り上がり、多くの氷塔ができたというのである。そこで、1995年9月に再びパスー氷河を訪れて、若干の科学観測も行った。

パスー氷河末端に関しては、氷河湖（この氷河

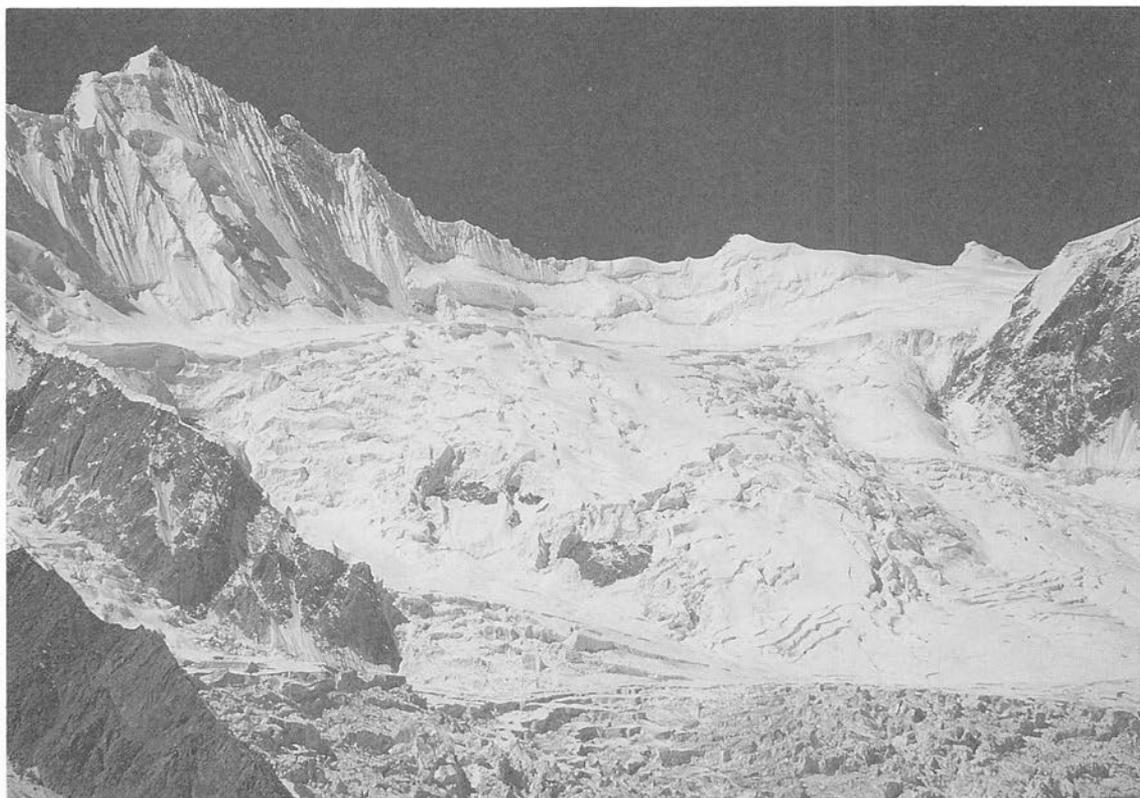


写真5・パスー氷河の涵養地域。シスパーレとパスー・ピークに囲まれた広大な雪原が白い氷河を生んでいる。

湖は20年前にできたという)に流れ込んだ土砂の量が2年前より増加した以外にはとりたてて変化はなかった。しかし、中流のパスーガルまで登ると明らかに大きな変動が認められた。それは先ず古いモレーンの内側に新たに氷河が掘りだしたモレーンの層が大規模にできつつあった。さらにその新しいモレーンの内側には二箇所で大規模の水塔が数多く盛り上がっていた。高さは予め聞いていたような50mはなく、せいぜい10mくらいであったが、黒ずんだ氷の色は明らかにパスー氷河の白い氷とは異質なものであった。この新しい乱氷地帯に足を踏み入れると、深く鋭いクレバスが平行して無数に走っており、まさにとぎすまされた氷の刃の上を渡るような緊張を強いられた。ピッケルでステップを切りながら慎重にそこを抜けて、対岸のラズダールへ向かった。そこは以前よりも氷の亀裂は少なく、2年半前の写真と照合すると、氷の表面も明確に低下していた。ラズダールで飲料水として使っていた氷河池も、その近くの新しいモレーンの上に載っていた黒い氷塊もみんな消失していた。そこで、2年半前の巨大な水塔

がどうなっているのか大変興味がわいた。ラズダール上流数百米の現場に行くと、大半の水塔はやはり姿を消していたが、最大の水塔のみはまだ融け残っていて、10mくらいはあった。今回氷河表面の融解速度を計測すると、9月の晴天時ではラズダール付近で1日4.5cm融けることが分かった。12月から3月まではこの辺は雪線の中にはいって融解が少ないこと、表面の土砂が厚くなると融解が遅くなることを考慮して計算すると、30mの水塔が10mくらい残っていても不思議ではなかった。ラズダール周辺の氷河の流速を測ると、一日当たり4.7mで、これは普通よりもかなり早い流速であった。ポトンダス(4150m)からパスー氷河の上流をみると、氷のクレバスは多いが、特に変わった様子はなく、その最上部の涵養域(氷河の水を造りだす降雪地帯)はシスパーレ(7611m)とパスー・ピーク(7478m)に囲まれた広大な雪原になっていて、これがパスー氷河が純白のまま流れる理由の一つと感じられた。

結局ラズダールとパスーガル付近の氷河の変化を要約すると、スケッチに示したようになる。即



写真6・パスーガル付近にできた新しいモレーンと氷の盛り上がり(パスー氷河)

ち、1992年から93年始めにかけてラズダールの左岸に押し寄せた高さ30mを越す氷の大波はさらに高さ20-30mの氷塔を数個押し上げた。その後この大波は1994年春ころより直線距離で2.5キロ下流のパスーガル側の右岸に移って、氷面が上昇するとともにここに大量の破碎氷を岸辺に打ち上げた。しかし、ここの氷塊はラズダール側で見られたような巨大な氷塔には成長しないだろうと推定された。その理由は、ラズダール側が堅固な岩壁があるため、氷河の大波の圧力は逃げ場がなく上方へ向かって発散されたのに対して、パスーガル側はアブレーション・バレー（氷河のモレーンと山の岩壁の間にできた凹地）になっていて、大波のエネルギーはモレーンを作り上げることで消費されると考えられるからである。この大波は今度はさらに下流へ移動して、右へ湾曲する部分の左岸に再び押し寄せ、最後は氷河末端の氷が前進するのではないかと予想された。

パスー氷河に見られた氷の大波は今回限りではない。パスー氷河の左岸を調べると、現在の氷面と古いモレーンの間に最近つけられたと思われる氷河の擦痕跡が連続して見られる。このことは、そう遠くない過去に氷面が大きく盛り上がった氷の大波がここを通過したことを物語っている。パスー氷河舌端の下流にある羊背岩（氷河の作用で羊の背のように丸く滑らかにされた岩）を調べると、写真に示すように二つの異なった方向性を持つ削痕跡が見つかった。もし氷河が途中で流路を変えたのであれば、連続的に変化しているはずであるが、そのような痕跡は見られなかった。従って、この二方向の削痕は異なった時期に少なくとも二回氷河がこの岩の上を通過したと考えないと説明できない。削痕の形から最初は右上から左下へ斜めに流れ、一度後退してから新たにほぼ上から下へ流れたと推定できる。一般に氷河が流れる時は周囲の岩を磨く力（スコアリング）ともぎとる力（ブラッキング）が働く。最初の流れではスコアリングが中心であるが、二番目につけられた深い傷跡は氷河が大きな石を抱え込んで前進してきたためのブラッキングによるものと考えられる。しかも削痕の風化が少ないことから、パスー氷河が繰り返し前進した時期はそんなに古い話ではな

い。パスー氷河の末端にある大きな氷河湖もかって前進してきた氷河に押しつぶされたことがあるという。

メルセル（1963年）によると、パスー氷河、バツラ氷河、グルキン氷河は20世紀初頭に最大規模になったという。パスー村の古老、モハンマド・バティ・カーン（96歳）に聞くと、50年前にはパスー氷河は現在のカラコルム・ハイウェーの橋のたもとまでできていたという。さらに古い時代には、フンザ河近くまで達していた。古いモレーンの残存がこれを裏付けている。パスー氷河は80年周期で大きな変動を繰り返してきたが、12年周期でも変動があると中国の学者が言い出したという。現在大幅に後退しつつあるが、その中でも小さな前進と後退を繰り返しているというのである。なお、隣接するバツラ氷河もグルキン氷河も80年周期で変動しているという。老人の若い頃は大変寒かったので氷河も前進したが、最近は異常に温かく、畑も一毛作から二毛作が可能になったという。このために氷河は後退を続けていると説明された。今から23-24年前、パスー氷河の融水をパスー村

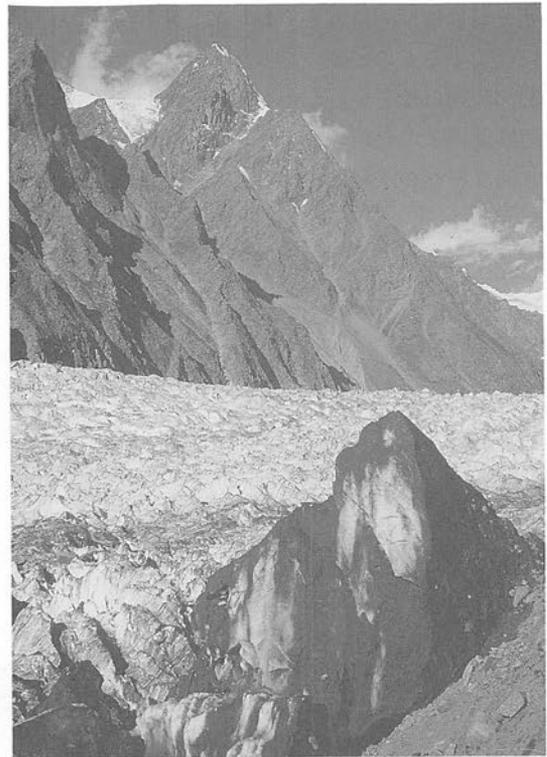


写真7・融け残った2年前の氷塔（パスー氷河のラズダール上方）

へ引き込むために一ヵ月かかって岩壁をくり抜いて水路が完成した。ところが、氷河が後退したために灌漑用の水路に融水が入れなくなり、このため貴重な灌漑水路がたった一日使っただけで駄目になってしまったという。

将来のパスー氷河の動向に関しては、氷河の観測経験のある現地の村人と契約して、3ヵ月毎にパスー氷河の写真を撮って送ってもらうことにした。1996年春の写真を見ると、パスーガル周辺のモレーンの隆起がやや進んだのと、氷河末端で氷の大崩壊があったほかは大きな変化は認められなかった。ところが、今年（1996年）の夏になって、胸がわくわくするようなニュースがパスーより届いた。それは、パスー氷河の末端の氷が最近になって前進を始めたというのである。昨年秋に見た時は氷河舌端と下流の岩壁の間に空間があったが、それがびっしり氷で埋まったというのである。私自身が確かめたわけではないので確実なことは言えないが、もしこの情報が正しければ、1993年にラズダールで認められた氷の大波が3年後に氷河末端まで届いたことになる。従来観測された氷河サージは短期間に大きく動いて、半年くらいの間に収束するものが多い。3年4年もかかる氷河の異常流動は珍しい。しかし、国立極地研究所の渡辺興亜博士の見解では、このように遅い動きでも氷河サージの一種とみなして差し支えないという



写真8・パスー氷河末端の羊背岩に見られた二種類の擦痕。少なくとも2回氷河がこの岩を通過したことを示す。

ことであった。

(次号につづく)

写真9・パスー氷河のクレバスを渡る



インド(2) ガンゴトリを巡る(1)

阿部 淳

●遠かったガンゴトリ

かって、いつも帰りを気にしてソコソコに切り上げて戻っていた頃は、ヒマラヤにいる自分の存在に酔おうと、自分を煽ってさえいた。今、インド～ネパール～パキ～インドと巡って4ヵ月、無意識の内にヒマラヤの中に吸い込まれて燃えている自分を識る。インドはこの3月にソーラン・ナラとマクロード・ガンジを訪れたし、かってカシミールに3度、シッキムにも入っているので、今まで3回遠望していただけのガンゴトリに入らなければ、この旅の欠落感を拭い切れない。

81年、ムスリーの北、スルカンダ・デヴィ (3,030m) の丘から展望したガルワール連山は、遠く長く円形の地平線を型取り、神々しく輝いていた。その中央に美しいガンゴトリ山群があった。87年には、ジャオンリ峰で雪崩遭難した女性同人3人の遺族らの7回忌がこの丘で行われた。ここから仰ぐジャオンリはこの連山の中央の盟主であ

り、僕には美しく気高い、彼女たちの墓標に思えた。忘れ難い山群である。

(1)懐かしいカウサニー

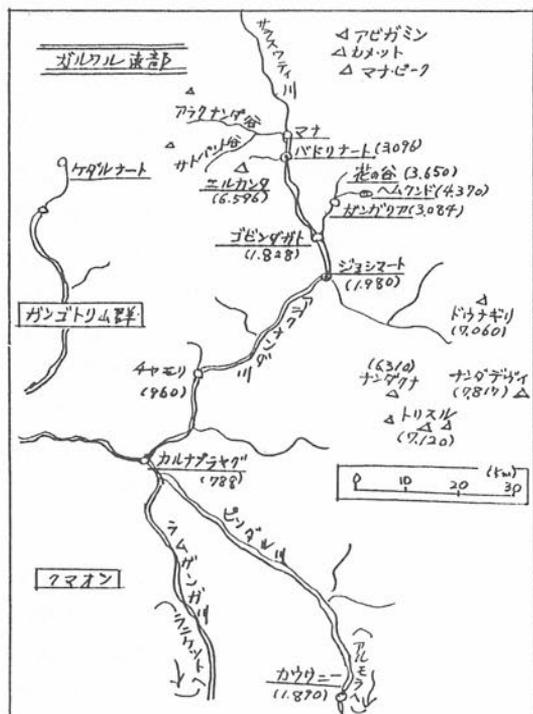
●ヒマラヤの精霊

ガンゴトリ山群を、北東部のパドリナートを起点に一巡することにした。デリーから北上しリシケシヤムスリーを経由するのが順当でもあろうが、クマオン・エリアのナンダ・デヴィ南面、カウサニー (1,890m) からのアプローチが忘れ難い。いつかボンベイの暇つぶしに買ったクマオン・ガイド (小冊子) に「マハタマ・ガンジー独立運動で疲れた心を休めに1829年にこの地を訪れた時、アシュラムの丘からナンダ・デヴィ山群を眺め、“ヒマラヤを仰ぐ最も美しい、二・三の指に入る所”と感嘆した」とあった。90年、この庭でヒマラヤの奇跡を見た。それは68年に遭遇した、ピンク色に変幻するエヴェレストの神秘とも違っていた。一面の灰色の視野に現れた薄白い一点が、やがて山稜を形づくり、ドス黒い鉛色の墨絵に沈んだ夜を背景に、灰色の姿を消した。そして真暗闇の世界の中で、ただトリスルだけが一層灰白く輝いて浮きあがった。それこそがヒマラヤの精霊であった。ガンジーが見たのも、ヒマラヤの金色の彩りではなく、暗黒時代のインドがガンジーに託した一抹の灯であり、ガンジーが神に託した祈りではなかったろうか。

●純白のトリスル

7/14. ドライバーと二人で出発、10時間でカウサニー。小雨で何も見えないが、あの精霊に再び会えるとは始めから不可能な事を知っていた。この村に不似合いな唯一軒の静かなクリシュナ・マウンテン・ビュウ・ホテルに直行する。

門では見覚えのある、でっぷりオーナーがジューと見ている。「覚えているかい?」「札幌だったか、神戸だったかな?」「札幌だ」「やあ、久しぶり! 前と同じ部屋にする?」「うん、今回は山はダメ



そうだけど」(480Rs=¥1,250)。前と同じスタイルでヴェランダ廊下のテーブルで水割りを飲みながらオーナーと話しをする。前にも彼から所望されていたのだが、「模様入りの、ネイビーブルーとホワイトのツーカーのナイロンのLLサイズのジャケット、肩幅20センチで胴回り46センチ。またはクォーツ時計かパイロット・ベンのセットを…、今度来る時にね」「うん、判った、判った」。その夜も小雨が続いた。

翌朝も視界5メートルのガス。去る前に隣のガンジー・アシュラムに寄る。小さなガンジー・ミュージアムには彼の一生を語る絵と写真が展示されている。彼の祈りに合掌し、庭から見えぬナンダデヴィに別れを告げる。ピンダリ川へ向けて、坂をどの位下った頃であろうか、視界一面の白雲に裂け目が見えた。やがてその間から真白いピークが覗き、青空をバックに山稜が現れた。トリスル山群だ。まるで絵のようだ。やっぱり来て良かった。下から振り返って仰ぐカウサニーの村は、新鮮な緑に白い家々が映えるピースフルな丘であった。

(2)聖地バドリナート

●北の終点の町へ

ラニケットとバドリナートの三叉路では、車がヌカルミにはまって動かない。ややしてやって来たバスにドライバーは50Rsを差し出して引っ張ってくれと頼んだが“ノー”。500Rs(¥1,300)でないとヤランと言う。しかし、バスも通れないためだろう、乗客たちが皆で押してくれて、抜け出した。カランプラヤグからアラクナンダ川の本道に入り、2時間強でジョシマート。想像よりも立派な大きい町だ。“良い安宿”を探す結局、ホテル・ドゥロナギリ(550Rs=¥1,500)しかない。その日、ウツタルカシから来たコックと対面する。気のやさしい敬虔なヒンドゥーである。その夜ドライバーが、一歳の子供の誕生日祝いを一緒にしてくれと言って、何処から買って来たのかウイスキーを取り出した。ガンゴトリのような聖なる地は勿論、このウツタル・プラデシュ州はドライ・エリア(禁酒地域)である。スペシャル・ディナーを注文して3人で祝った。ドライバー君の嬉しそうだったこと!

ここからバドリナートまでの道は狭いうえに車

▼カウサニーからトリスルを見る



やバスが多く2時間交替で一方通行になる。ガンガ源流のガンゴトリはヒンズー教の、そして東のヘムkund湖はシク教の聖地であり、信者達で溢れるからである。その分岐点ゴビンダガドは毛布やショールを売る商人で溢れている。ご婦人達は品定めに余念がない。昼過ぎには車の終点マナに着く。この西の川はニルカンタ北面サトパント谷に至るアラクナンダ谷で、'93帯広ビスタクラブの第一希望もこのコースであった。マナには軍の基地があり特別許可なしには先に入れない。

5分戻ってバドリナート(3,096m)、先程すぐ真上にチラリと見えた鋭峰ニルカンタも雲に隠れてもう見えない。宿はあまりクリーンとは言えない政府系レスト・ハウス(180Rs=¥500)。97年には5つ星の同じ政府系ホテルがオープンすると言う。午後、バドリナート寺院を訪れる。狭い露店の道を、溢れる巡礼者や信者達と下り、ババさん(サドゥ=修行僧)の座り並ぶ橋を渡って寺院に上がる。美しく着飾った婦人もいれば背負われた老人もいる。川べりにはガートと温泉浴槽がある。ガンゴトリは、ヒンドゥーの神シヴァが天上のガンガを地上に降ろした源流の聖地、バドリナートはその三つの源流の一つとされる聖なる町である。

●ニルカンタ追悼

宿に戻って、庭で食堂の主人と四方山ばなしをしていると、彼は一昨年のニルカンタの日本隊の事故を知っていた。帯広の登山隊が遭難した時、奥さんがここにいたが“そう、Mr. マツヤマが駆込んで来て、泣きじゃくってばかりおり、話も

聞けなかった”と言う。佐々木裕一隊長（'93年H A J評議員）ら7人は、北東稜を攻めて上部をトラバース中6人が雪崩に遭遇、C2に残っていた松山隊員だけが生還したのであった。明日はBCまで登り追悼する予定であった。

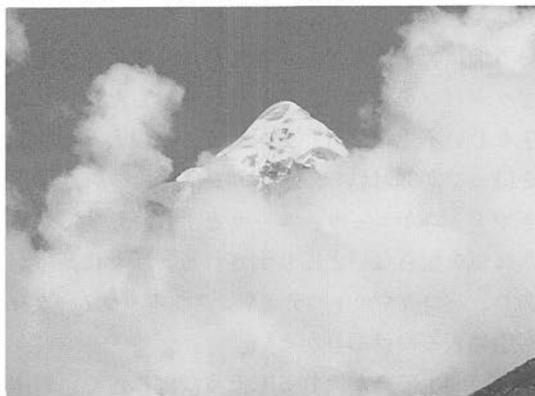
翌朝4時半、寺院の祈りのサウンドと宿の従業員の話し声で眠れず散歩に出るが、寒く山も見えない。7時前、コックとドライバーが来て出発、リシガンガの谷を溯る。急登30分でカルカとパパさんの穴家、ガスの中とはいえ斜面一面に続くお花畑が美しい。3時間半で今春の陸軍登山隊のベース・キャンプを見つけ渡渉点を探す。広い良いBC（c4,000m）だ。帯広隊の遺族の方々が作られたと言うレリーフを一時間も探すが見つからない。場所を聞いて来なかった失敗である。尤も、後で聞くと、レリーフはもっと下部で、それも盗まれたのか、いつしか消失したと言う。佐々木裕サンはかつて札幌にいた古いH A J会員だし、帯広の告別式では尾形さんや寺沢さんも来道し、共に亡き隊員達やご家族・友人達とも接していた。ニルカンはガスの中だが、広い芝生に仮設の墓を造り、高山花と持ち合わせの供物を添えて追悼を捧げた。ドライバーは前半急いだせいか“頭が痛い”と横になっているが、コックは両手を合わせていた。夕方、雲が切れてニルカンのピラミッドがくっきりと姿を現し、やや茜色に燃えた。きっと、応えてくれたのだろう。

(3)花の谷とヘムクンド

●基地ガンガリアへ

翌朝、ニルカンは再び顔を見せ、見送ってくれた。だが7時から雨、8時のゴビンダガート（分岐；1,828m）では大雨となった。ここはバスや車の駐車場で溢れている。やがて小雨になるとバスが着く度に対面の斜面をジグザグに登る人の列が出来る。ポーターは上のガンガリアまで3人必要、1人400Rs（¥1,000）+昼メシ付きと高い。それでもイヤだと言う年寄りもいた。10時出発、川の周辺にも露店が並び、宿やテントがビッシリだ。登路は結構きつくインド人の列ができ、おまけにお客を運ぶ4人の新興風の木製のカゴ、ミュー（ドンキー＝ロバ）、ドッコ（1人籠）が駆け足で行き来するから安心できない。4時、1,200m登っ

▼バドリナートから仰ぐニルカント



て中継基地ガンガリア（3,084m）に着く。大型小型の宿の街である。コックとポーターは現れず、テントサイトを探しに歩いたがそんな余地はなく、レスト・ハウスで休んでいる間にここに決めた（500Rs=¥1,300）。彼等が着いたのは1時間半後であった。ここのドミトリーに珍しく西欧人2グループがいた。静かな花の谷と訪れる人のいないヘムクンドの中継点を想像していたが全くの誤解だった。この街の客は500人とか、99%がインド人である。

翌日、コックとValley of Flowers（花の谷、3,650m）へ登る。幅2km、奥10kmの谷に高山植物が乱れ咲くが、まだ2週間早いらしく、種類はむしろニルカンのリシ・ガンガの方が多き気がした。谷のスケールは比較にならないが…。人はわずか30人、あれだけ行列を成して登った人も花には縁遠いらしい。ハネムーン・カップルや若者グループが三三五五現れる。南を見上げるとヘムクンドの登り、その急登には息を呑む。

●シク教の聖地・ヘムクンド（湖）

かつて紀行を読んだ事があるが、その湖への道は人っ気のない孤愁漂う辺地のイメージがあった。それがどうだろう。若者衆、子連れファミリー、新婚カップル、老夫婦など幾百人ものシク教徒が4,370mの聖湖を目指して、1,300mの急な電光坂を数珠つなぎで登っている。まさに圧巻である。“ワイグラー！ジェイグラー！”と掛け声をかけあいながら、飛ばしてはスグ休む。こちらは休みなしのピスタリ・マイペースですぐ“こんにちわ”。“グラー”は先生・親をあらわし“成功”の意味だそうだが、掛け声は“ホレ行け！ソラ行け！”

と言ったところか。それに彼等の容貌は集まると異様だ。ムスレムと同様に一様に顎髭をのばしている他に、子供までもが頭髪を切らずに巻き上げてターバンを巻いている。それを外した様はなお生々しい不思議な雰囲気が漂う。この人々の隙間を縫って200頭はいると言われるミューやカゴ担ぎやドッコがエッサ、エッサと上り降りするから常に気を配らないと振り倒される。所々に茶屋があり、パコラやチャパティやミネラル・ウォーターも手に入るのはありがたい。

3時間半で霧が流れる寒そうな湖に着く。対岸は霧で見えない。修道所と小さい寺がありシク教徒で溢れている。熱心な信者は海水パンツ一つで、雪渓の残る冷たい湖にザブンと入り、沐浴というよりは2〜3度身を屈伸させてから慌てて逃げ戻る。親に入れられて泣きわめく子供もいる。女性用は屋内にある。写真をとっていると、“アンタはどうして入らない？”“風邪をひいちゃアカンからね”。コックと、離れた静かな湖畔に移動する。霧が流れて時折、雪の残る緑の山肌が湖面に映えて美しい。これこそが想像していた氷河湖ヘムクンドである。だが動かないと寒くなる。2時間でガンガリアに戻る。

●ミュー（ドンキー）公害

①ミューは細い急な坂道を2〜3頭続けて登り降りし、馬（ミュー）追いは先頭にいる訳ではないから、当然ミュー任せだ。彼等には人よりもルピーを稼いでくれるミューのほうが大切なのだ。カゴやドッコ担ぎも含めて、ここはビジネス強者の世界だ。

②登降の全てにミューの糞がある。狭いトレイルのミューの歩き易いところは即ち、人間の歩きたい所と一致するから、人の道は糞の道だ。急登で身をかがめると目の前に糞があり、匂いが直接



◀ヘムクンドにて

▼花の谷



プーンと鼻に吸い込まれる。時には目の前でボタバタ落とす。糞を踏まないでは歩けない。ここは糞公害、いや糞の世界だ。

③ミューは人間の顔を尻尾でヒッ叩く。道を譲ってやったのはこちらなのに横を通り過ぎる頃、フンだらけのシッポで顔をピシッと叩かれる。一度だけではない。歩く人間は無用の世界なのだ。

④カゴの4人組は、登りでは後ろから掛け声がかかるが、下りで客を乗せていると加速度が付いて彼等も必死だから、邪魔だと怒鳴りつけられる。すいません！ここは聖地への巡礼路でなくて、担ぎ屋の競争の世界だ。

⑤ネパールでもインドでも家畜や動物と擦れ交わす時は、山側に身を寄せないと危険だ。だが、ここでは馬方はミューを山側に通らせたがる。ミューが谷側に落ちたら大損だ。持ち主に小っぴどくやられてクビどころではない。こうして人間が谷側に避けさせられる事もある。ここは人間蔑視の世界だ。

これがインドの論理である。インドでは誰も商売の邪魔をしてはいけないし、郷に従うべき事も知ってはいるが、日本の管理主義・全体主義には懲り懲りだが、馬追い・担ぎ屋の傍若無人放任は“如何なものか”。因みにミュー料金は、ゴビダガート〜ガンガリアが350Rs（¥900）、ヘムクンドまで450RS（¥1,150）、4人カゴは400Rs（1,000）でインド人が易々と払える額ではない。尤も、夕方は安いし、雨季が終る“シーズン”には、もっと人が増えてもっと高くなるという。

翌日、ジョシマートに戻った。次は第二のヒンドゥ聖地・ケダルナートだ。

地域ニュース

《ネパール》

マナスル登頂断念

マナスル(8,163m)からスキー滑降のため入山していたラ・ネイジュ隊(宮下岳夫隊長(39)ら6名)は、ノーマル・ルートの7,700m付近まで到達したものの強風のため登頂を断念した。宮下隊長は、10月13日同地点からBC(4,700m)まで一気にスキーで滑降した。日本人のスキー滑降の高度記録としては、1970年三浦雄一郎がエヴェレストのサウス・コル付近からのものがあるが、これに次ぐ記録となった。

また、前号で報告した登稜会隊は、9月28日に杉山敏康(28)も登頂に成功した。なお、30日に登頂した同隊の有川隊員が帰路泊ったのは、ラ・ネイジュ隊のC3であった。

《インド》

ガンゴトリ I に登頂

ガンゴトリ I 峰(6,672m)に北東稜から挑んでいた帯広わらじの会隊(森実裕隊長(47)ら6名)は、9月30日に隊長と鳴海大助副隊長(25)、片桐明子(37)、西本理恵(26)の4名が登頂に成功した。

メルーは登頂を断念

秀峰メルー(6,660m)にシャークスフィンから登頂を目指していた松本クライミングメイトクラブ隊(馬目弘仁隊長(27)ら5名)は、カプセル・スタイルで6,160mまで到達したが、岩質が悪いため登頂を断念した。

スリナガールで爆破事件

10月23日、スリナガールで爆弾を仕掛けられた車の爆破により少なくとも二人が死亡、警官二人を含む五人が重傷を追った。爆発現場は警戒の厳重なゲストハウス近くで起こった。このゲストハウスには普段は200人を超す政府や州の役人や立

法者が住んでいるが、建物には被害は無かった。現地の新聞によると、10月21日にも選挙キャンペーン中の民衆七人が爆死しており、カシミール州の警察並びに病院の発表に拠ると、カシミール分離独立派の暴動による死者は、過去6年間で少なくとも二万人を超えており、一節には五万人近いとも云われている。

多数の分離独立派は、1990年以来カシミールの独立若しくはパキスタンへの併合を強硬に訴え、暴動を続けている。(ロイター共同)

《ブータン》

女子修道院救済行進に王室参加

10月27日、ブータン国王ご一家が老若男女約100人の民衆に混じって、ドクラからセムトカまで行進なさった。この行進は、18世紀にチェジェイ・ナワン・ペカーが建立したプナカのバチエン・カルモ女子修道院の修復費用を捻出するための救済募金委員会主催の行進で、30万ニュルタムを上回る募金が集まった。公式行事でもないこの行進に国王ご一家が非公式に参加なされ、国民の感動を誘った。

プナカに新病院建設

ドイツ・ブータン慈善基金のメンバー8人の尽力で2千3百万ヌーを上回る寄付金をかけて、9月30日プナカの聖地に新しく建設された病院が、民衆に喜ばれている。

オープン・セレモニーには同基金創始者の一人、在マレーシアドイツ大使ハロルド・ネストゥロイ氏も出席された。

2万人を超えるプナカや近隣の民衆が、同病院の恩恵を受けるものと思われる。

手術室や歯科治療器具も完備し、入院病棟には25ベッドの用意があり、また、ドイツからシュニット医師が向こう5年間勤務しており、これまでティンブーまで通っていた患者もプナカで治療が受けられる事になる。

郵便法施行

郵便と電信の正式な分割に伴い、10月1日からブータン郵便法令が施行される。近いうちに新法人の取締役会が催される予定である。

《中国》

カラコルムで大地震

新華社電が11月19日、中国国家地震局の情報として伝えたところによると、同日午後6時44分、中国西部の新疆ウイグル自治区と、インド、パキスタンとの国境付近のカラコルム山脈で、マグニチュード(M)7.1の地震を観測した。

トピックス

第18回インド・ヒマラヤ会議開催

HAJ恒例のインド・ヒマラヤ会議が下記のとおり開催される。

記

- 1.日時：1997年1月12日(日)9時～17時
- 2.場所：かんばヘルスプラザ東京
- 3.内容：インド・ヒマラヤ1996年／登山報告(ゴンゴトリ山群、ヒマチャール・プラディシュ山群、カシミール山群)
- 4.会費：3,000円(昼食は各自)
- 5.申し込み：HAJ事務局

第4回 中国登山研究会開催

日本ヒマラヤ協会主催の第4回中国登山研究会が下記のとおり開催される。

記

- 1.日時：1997年1月19日(日)9時～17時
 - 2.場所：かんばヘルスプラザ東京
 - 3.内容：中国登山の手続き／中国の山々／登山報告(梅里雪山一周の旅・中村保氏、チョモランマ登頂／山崎幸二氏、ニンチン・カンサ登頂・石澤好文氏、ムスタグ・アタ西稜・中川裕氏)
 - 4.会費：3,000円(昼食は各自)
 - 5.申し込み：HAJ事務局
- 財政支援金：増田隆 2千円

Books

ヒマラヤ名峰事典(平凡社刊)

これまでも世界山岳百科事典、朝日小事典のヒマラヤ、外国山名辞典(1984年8月刊)などが出ているが、本書は6,000m以上の500余座の私などが全く聞いたことの無い名前の山まで(浅学ゆえ)が含まれた「ヒマラヤのみ」の全域を網羅した「名峰事典」である。

執筆者は山森欣一ら17名。写真は全て藤田弘基撮影のモノクロ。内容は登山史から文化人類学まで入っている。範囲は東部ヒマラヤ(これまでアッサム・ヒマラヤと呼ばれていた)のナムチャ・バルワ、ギャラ・ベリ、ニェギェ・カンサン、カントから西はヒンドゥ・ラジのコー・イ・モルスグ、コー・イ・バンダカーまでである。

これだけのものが1冊にまとまったものは日本語版では類を見ない。ただ地域によって登山史の書き方に差がある。山によっては登頂した登山隊すら抜けていたり、登頂者が省かれているものもある。例えば1985年に私達が登った植村直巳物語エヴェレスト撮影隊は全く出て来ない等である。日本隊くらいは表でもいいから全て書いて欲しかった。

とにかくヒマラヤ経験者、研究者、これからヒマラヤを志す人達にも非常に役立つ、必携書である。ヒマラヤの山名に関しては外国山名辞典に頼らざるを得なかったところがあるが、今度はこれを是非役立てて欲しい。(八木原囿明)

四六倍判／650頁 収録500座 モノクロ写真
330点 薬師義美・雁部貞夫編 定価10,300円

東京集会のお知らせ

日時 12月16日(月)午後7時
望(忘)年会とします。会費千円
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

続・現代のヒマラヤ志向とは？

本誌300号では、二極化が定着した日本のヒマラヤ登山にスポットを当てて、1970年代から現在まで足繁くヒマラヤに通う我国のヒマラヤ・ニスト47名のアンケートをご紹介した。今回は、そのアンケートをもとに若干の分析を試みた。

今回は幾つかの項目については、過去に2回実施した結果と比較してみた。それによって、我国のヒマラヤ登山の推移の一端を知る事ができる。

尚、アンケートの回答者は第一回（1979年）41名、第二回（1988年）53名、第三回となる今回が47名であるが、三回とも回答者として登場したのは、八木原罔明一人である。前回に引き続き回答者となったのは、名越實ら15名であった。また、第一回回答者中、野中和雄、寺西洋治、藤倉和美、加藤保男、吉野寛、小松幸三、小西政継の7名が、第二回回答者中、山田昇、三枝照雄、馬場哲也、日野悦郎、館野秀夫の5名が死亡し、日野を除く11名が海外の高峰での遭難死である。諸氏の冥福を祈りたい。（文責・山森欣一）

アンケートの対象者は、最近の傾向を知るために90年代に入ってもヒマラヤ登山を実施している人に主眼をおいた。遠征中とわかっている人を除き、96名にアンケート用紙を送り、47名から回答を得た。この他期限に遅れて届いた人が1名。回収率は50%であった。

アンケート項目には、回答しづらい要素（例えば「最も」で一つを選択するのが困難）もあり、また設問Ⅻのように、設問者が期待したのは日本人であったが、設問が不明瞭なために外国人を挙げた人もいるなど、若干設問に細かい配慮を欠く結果となり、回答者の皆さんにご迷惑をお掛けしました。

今回のアンケートの特徴は、テイクイン、テイクアウトについて3項目設けた事。また、最近チョ

モランマで騒ぎとなった、高所での救助について設問したが、当然のことながら微妙な回答が多くなった。

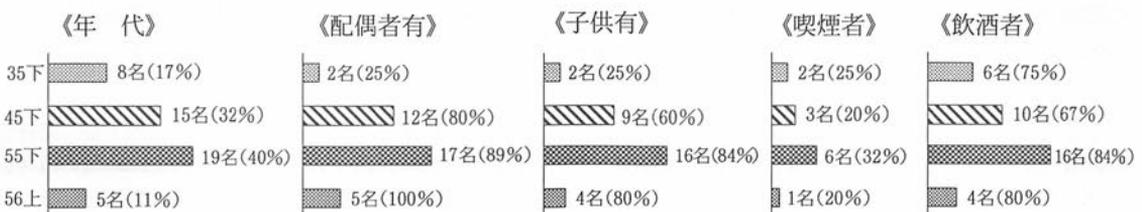
御多忙中にもかかわらずご回答をお寄せいただきました回答者の先輩諸兄に対し、紙面を借りて心より御礼申し上げます。

《回答者の傾向》

アンケートの回答者は、35歳以下＝8名、36～45歳＝15名、46～55歳＝19名、56歳上5名であった。

社会全体に禁煙が常識になりつつあるが、山の世界も御多分にもれず、喫煙者は4名に1名の割合であり、前回の3名に1名から確実に禁煙が進んでいることがみてとれる。

◎アンケート回答者(47名)の傾向



三回のアンケートの変遷とまとめ

I ヒマラヤ登山に何を求めるか？

三回とも「未知と困難」が約半数を占めたのは妥当な結果であろう。「楽しさと健康の維持」が前回の9%から13%と増加傾向にあるのは、時代を反映したものである。

II どのようなチームを好むか？

「同人」がもっと伸びるかと思ったが、意外にも「単一」が前回と同様に四分の一を占めて健闘している。

III 登山形態は？

この項目が一番時代を反映した結果となった。日本のヒマラヤ登山は、1980年代に入り二極化の傾向が見られていたが、「オーソドックスなピークハント」が16名で前二回の3倍以上となった一方、「速攻」も15名となり確実に伸びた結果「壁、冬、無酸素」などの激減により二極化がますます浸透している事を窺わせる。もっともこれからは、八千メートル峰を中心に「ピークハント」の一極型へと急速に傾斜するのではないかと、との恐れも根強くある。

IV どの地域に興味があるか？

この項目が最も回答しにくかったとみえて、複数回答が多く、公平さを欠く結果となり集計不能となった。

V 好きな山ベスト10

1位から5位までに挙げられた山を、好きな順

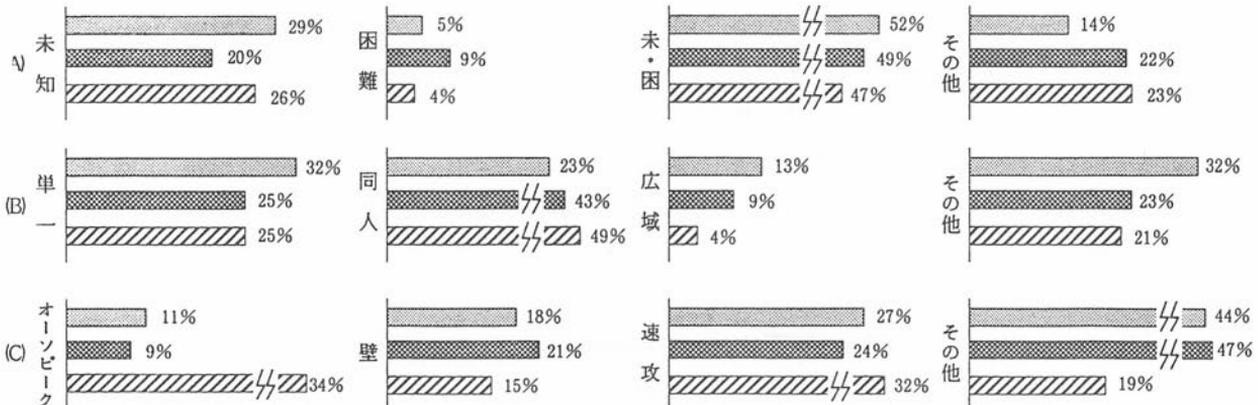
◇求めるもの(A)、チーム(B)、登山形態(C) 3回の変遷

と解釈して5点から1点まで配点した結果は、各年代層から万遍なく支持されたK2が断然トップとなり、エヴェレストとナンガ・パルバットが2位を争い、マカルーとナンダ・デヴィが4位を争う結果となった。

	山名	1~5位まで指名した人数					合計点
		1	2	3	4	5	
1	K2	11	3	7	3	2	96
2	エヴェレスト	6	2	3	2	3	54
3	ナンガ・パルバット	3	6	1	1	4	48
4	マカルー	3	2	1	3	3	35
5	ナンダ・デヴィ	5	1	1	0	1	33
6	ダウラギリ I	2	3	0	1	1	25
7	ラカボン	1	1	3	1	2	22
8	カンチェンジュンガM	2	0	2	2	0	20
9	チョゴリザ	0	3	2	0	0	18
10	アマダブラム	0	2	0	3	0	14

VI 行きたい山ベスト3

ブータンのガンカル・プンスムとインドのナンダ・デヴィが4名の支持を受けて首位を分けた。いずれも現在登山出来ないところである。K2とナンガ・パルバットが3名に支持されて3位を分け、エヴェレスト、マカルー、マナスル、アンナプルナ I、チョゴリザ、梅里雪山が続いた。その他16座の名前が挙げられた。



IX 低圧実験室は是か否か

表のとおり9対1で前回に引き続き「賛成」が「反対」を大きく上回る結果となった。しかし、「自分は受けないが他人が受けるのは自由」の理由を分析して、低圧室について肯定的か否定的かを加えてみると、19(40%)対13(28%)と賛成が上回るものの両者が接近してくる。

この比率は前回も40%対28%であったので、低圧室についての登山者の意識は全く変わっていないことになる。という事は、前回も指摘したように「低圧室」を稼働する側から登山者への積極的な働きかけが欠けていることが想定される。

低圧室でのトレーニング

項目		合計	35以下	36-45	46-55	56上
賛成	賛成である 自由・肯定的	9 10	3 1	1 4	3 4	2 1
	小計	19	4	5	7	3
反対	反対である 自由・否定的	1 2	0 1	0 4	0 6	1 1
	小計	13	1	4	6	2
その他	自由・各自の考え	8	1	4	3	0
	自由・理由不記	6	1	2	3	0
	無回答	1	1	0	0	0
	小計	15	3	6	6	0
合計		47	8	15	19	5

X 影響を受け、感動した書物

ヒマラヤ登山の切っ掛けは書物によるところが多いと思う。各年代から支持されたモーリス・エルゾグの「処女峰アンナプルナ」が15名で一位となり、前回は同書と共にトップを分け合うほどの支持を受けたヘルマン・ブールの「八千メートル上と下」が二位であっても5名と激減した。

植村直巳の「青春と山に賭けて」が3名、ティルマンの「高い山・遥かな海」が2名と続いた。この他に挙げられた書物は下記のとおり。

地図の空白部 (エリック・シプトン)

XOUR EVEREST ADVENTURE (ジョン・ハント)

若き日の山行 (ルイ・ラシュナル)

ブロード・ピーク (マルクス・シュムック)

ヒマラヤ (ケニス・メイスン)

無名峰の聳える国 (ヘルベルト・テイッヒー)

キャンプ・シックス (F.S. スマイル)

ヒマラヤの高峰 (深田久弥)

ヒマラヤ登攀史 (深田久弥)

チベットの七年 (ハイリッヒ・ハラール)

マカルー西稜 (ロベール・パラゴ他)

ヒマラヤ アルパインスタイル (共著)

ヒマラヤ 第三の極地 (ディーレンフルト)

凍れる河 (オリヴィエ・フェルミム)

白きたおやかな峰 (北杜夫)

ヒマラヤ冒険物語 (クリス・ボニントン)

K12峰遠征記 (岩坪五郎)

K7初登頂 (東京大学登山隊)

(* 上から年齢の高い層)

XI 自分が最も影響を受けた人

外国人：ラインホルト・メスナーを挙げた人が13名。離されてティルマン、クリス・ボニントンが4名、ヘルマン・ブールの3名と続く。モーリス・エルゾグ、ダグ・スコット、ニコラ・ジャジュールも複数の人が挙げた。その他に8名の名が挙げられた。

日本人：原真と山田昇が4名、小西政継と八木原罔明が3名で続く。この他15名の名が挙げられた。その内の9名は先輩・パートナーなどみじかな人を挙げたのが最大の特徴である。

XII 日本のヒマラヤ登山に影響を与えた人は？

冒頭に述べたように設問は日本人を予定していたが、外国人を挙げた人もいた。3名連記としたが1名や2名の回答もあった。

一位に挙げられたのは今西錦司が10名、榎有恒9名、小西政継7名。二位に挙げられたのは小西9名、原真とメスナーの4名、今西と植村直巳の3名。三位は原6名、小西5名、山野井3名。

結局、トータルでは小西を挙げた人が21名と段トツであった。以下今西13名、榎と原11名、植村8名、深田久弥とメスナー5名、山田昇と山野井4名、八木原罔明とエルゾグ3名と続く。

小西の垂壁のジャヌー北壁と巨峰カンチェンジュンガ北壁の無酸素新ルート成功が、登山界に大きな影響を与えたことを考えると、これは順当かも知れない。原の票が案外に伸びなかったのは36~45世代の支持を得られなかったためであり、逆に今西と榎が健闘しているのは、46~55世代の支

持のためである。

この他複数の支持を得たのは、田部井淳子、坂下直枝、重廣恒夫、加藤保男であり、この他にも15名の名が挙がった。

XIII 高所で救助しますか？

自身が疲労困憊している時に、八千メートルの高みで救助を要請された時、死を覚悟して救助するか、どうか。これはチョモランマで実際に起きた騒動について岳人がどう考えているのかを知るために行った。

設問は当然「自己責任」の高所登山においては、「救助しない」が圧倒的多数を占めることを想定して、「疲労困憊」や「死を覚悟して」などを入れて、条件が厳しいことを強調した。しかし、35下と36～45の各5名と46～55の4名が「救助する、したい」と回答し、「仲間なら救助する」の3名を加えると38%が救助する側になった。「救助しない」は25名で51%。

このほどのマナスルでの若者達の行動は、結局このアンケートの結果を裏付ける形になった。しかし、このようなケースが起きた時に「救助しなかったのは人道上問題がある」などという評論が定着しないようにしたいものである。

XIV～XVI テイクイン、テイクアウトは？

人気の高い山のゴミ公害から始まったテイクイン、テイクアウト運動は、当然濃淡の差はあるにせよ、ほぼ定着したようだ。テイクインについては94%、アウトについても87%の人が実施していると回答した。[テイクインは当然必要だが持ち込み量を減らす（贅沢や無駄を排す）努力がテイクアウトを容易にすることにつながる。企業から物をもたらすのは無駄を多くすることにつながりやすい]との近藤和美のコメントもあった。また、この言葉の意味がわからないとのコメントも2名からあった。

トイレについては、全員が指定していると回答したが、使用後のペーパーの焼却については、トーンダウンして18名（38%）の人が実行していないと回答した。

計画書と報告書への記載については、さらにトーンダウンして20名が計画書に載せず、19名が報告書に載せていないと回答した。もっとも、[この

運動が叫ばれる前から心掛けており、いまさらわざわざ載せることはしていない。明記しておきながら実行していない隊もある]との近藤和美の指摘や、[こんなことを毎回計画書や報告書に書かなければならないことがなさない。当たり前のことをことさら威張って言うことでは無い]との須藤建志の指摘もあった。

しかし、登山者同志が連携しながら、山を汚染しない工夫をして行かなければならないことは、自明のことであるから、その工夫を報告書に掲載することによって、多くの登山者に注意を喚起する役割は果たせるものと思う。

XVII 魅力あるヒマラヤ登山とは？

幾つかの要素をおり混ぜた回答が多かったが、共通項として「気のあった仲間」が浮かび上がるのは妥当なところであろう。

46～55の回答の中にある「できそうもない事を計画し、仲間を募り、トレーニングし、自分達の納得できるやり方で登りきる（名越）」、「生命を実感できる登山（坂原）」、「物質的不自由さの中にある精神の自由（須藤）」、「ヒマラヤこそ自分達の力でルートを開き、自分等の力で登る（広島）」などの声が多く、登山者に支持されることを期待したいところである。

XVIII 現在のヒマラヤ登山への注文は？

高さに関係無くノーマル・ルートへ殺到していることを指摘する声が多いのは妥当なところであろう。

35下の回答の中にある「自然に優しく（林本）」、「現地の人、自然社会を本当に思っていること（星野）」などの声が若年層から上がっていること



▲テイクアウトして美しいヒマラヤを！

は、まだまだ捨てたものではないな、との思いである。

XX 21世紀のヒマラヤ登山は？

「二極化する」と回答した人が約40%に上がったが、その二極の中身にはかなりの濃淡があった。

また、全体的に衰退傾向と見る人と、中身は別としてとりあえず数だけは増えると考える人もいて、中身の問題も加えると、(21世紀初頭は別にしても) 予測し難い状況にあることを窺わせる。

終わりに

アンケートの回答全体から受ける印象としては、ヒマラヤ登山の実践が多種多様化しており、かつてのように一つないしは二つの概念では括れないと言うことである。それはまたレベルの問題は別として「個」が確立している反証でもある。

その結果として「他人には干渉しない」傾向が増えるのは当然の成り行きである。そして、進む先も細分化して行くことになるのであろう。

しかし、どのような考え方でヒマラヤ登山を実践するかは自由であっても、使用する側の登山者

としては、後世の愛好者にこの舞台を引き継いで行く義務はある。そのためには、幾つかの共通項については使用上の制限を受けることになるのであるが、そのことについては干渉ではなく、登山者同志の議論や知恵の出し合いが必要である。

国際政治の安定によって、未だかつて無いほどヒマラヤ登山の舞台は広がっている。登山者自らの少しの規制がこの舞台を後世に引き継ぐ一翼を担っていることを認識したいものである。

[敬称は略しました]

[お詫びと訂正]

300号のアンケートの中で下記の方の氏名に間違いがありました。ご迷惑をお掛けしました。お詫び申し上げます。

ページ	記	
	誤	正
5	林文 章	林本 章
9	吉野 淳	古野 淳
14	笠原芳樹	笹原芳樹

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルを行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪後	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢を行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674

書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

小カラコルムからパミールへ

—— ディラン (7257m)、ムスターグ・アタ (7546m) 連続登頂 ——

岩崎 洋

1996年7月24日朝、私と鈴木はディランの頂へ向けて歩を進めていた。振り返ると6350m地点に我々のツェルトが風に煽られている。昨日のブリザードに比べればそれほどでもないし、中には石を入れて来たのでなんとか持ち堪えてくれるだろう。

鈴木は左前方15m位の所を登っている。所々ブルーアイスになっていて傾斜は45°位、ロープを

使う程では無いが降りるの事を考えると頭が痛い。滑ったら氷河の一部になってしまうのは火を見るよりも明らかだ。私は鈴木より少し右手にルートを探り、ゆっくりとカメの様に少しずつ登って行く、此の山あまりたおやかではないな、などと考えながら……。

★

此の計画がスタートしたのは95年の秋頃。夏に野沢井、今村の両氏とティリッチ・ミールを登った後、ガンゴトリに入る“雪と岩”パーティーに混ぜてもらいサトバントに登った。デリーに戻ってくると、既に帰国していた野沢井よりムスターグ・アタへ行かないかとのFAXが来ていた。

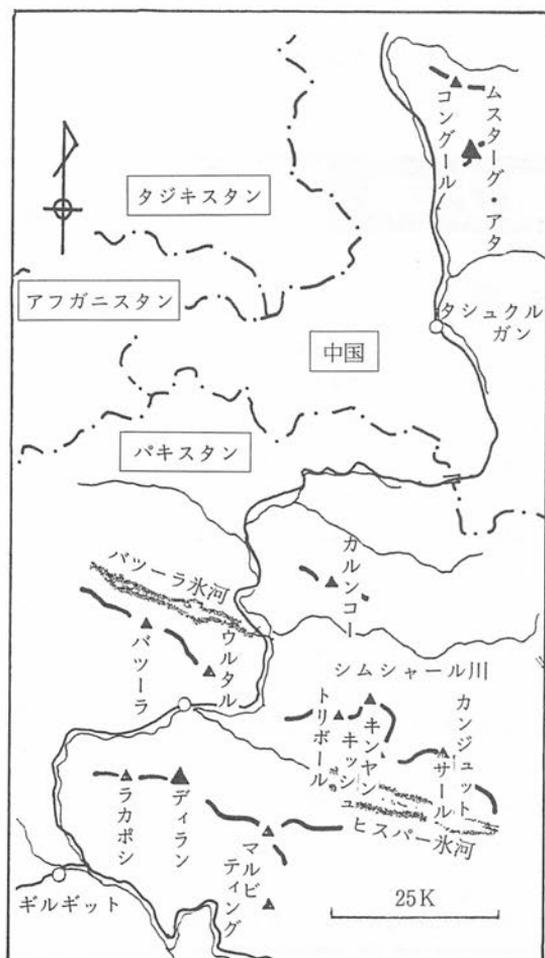
以前から目をつけていた尾根で、よく酒を飲むでは話題にしていた東面から取り付く手付かずのルートである。メンバーは3～4人、各自順化を済ましてからカシュガルに集合すれば安くあがりそなので直ぐにOKの手紙を出した。そうしてそのままインドに留まり、忙しかった夏を反芻しながらマーシャルの山村で冬を越した。

★

酒が入ると山の計画はどんどん話が大きくなる。1月の終りに帰国、2月は富士山頂でコックのアルバイトをしていたので、具体的な計画を話し合ったのは3月に入ってからだった。

アタのメンバーは4人。夏にムスターグ・アタで行われるサマー・キャンプの隊長を務める中川、昨年ティリッチ・ミールと一緒に登った野沢井、'93にピラミッドピークで山行を共にした鈴木、そして私、みんなヒマラヤ協会の飲み会でよく顔を合わせるメンバーだ。

順化については、中川は夏にアタに登るので問



題無い。それも西稜から登るので東面から西面に抜ける予定の我々には心強い。さて我々はどうするか？カトマンドゥに飛んでトレッキングパーミットで登れる山に行くか、パキスタンでトレッキングの範疇である6000m以下の山を登ろうと話は進んでいたのだが、或る日、野沢井からディランの南面へ行こうという案が出された。

7257m、南面から西稜に至るルートは既にあるが、南面から頂きに立った者はいないという。マジックマウンテン隊の報告書を見ると、そのルート以外にもルートが引けそうなので許可がとれたら3人で行く事に決った。酒の席は寒くもないしひもじくもないので直ぐこういうことになる…。

イスラマバードにあるシルクロード社の督永さんにディラン峰の許可取得と、今年のティリッチ・ミール同様観光省用の書類作成、キッチン用具、テント等のレンタル、コックの手配をお願いする。パキスタンで我々が安く山に行けるのはこのシルクロード社によるところが大きい。その年の春に許可を取って夏に登るなんてできそうもなかったのだが、許可はあっさりとおりました。良い時代になったと言える。

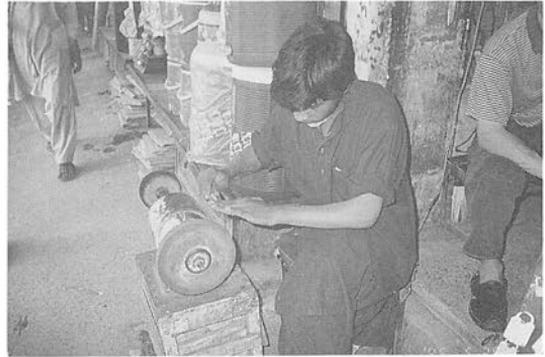
こうして山は決まり、アタは夏からそこにいる中川、ディランは昨年引き続き野沢井が隊長を引き受けてくれることになっていたのだが……。

とても悲しい事故があり、野沢井はアタ、ディランともに参加できなくなってしまった。野沢井が不参加となり、アタは3人、これは何とか行けそうだが、ディラン2人、これは正直言って少々考え込んでしまう事態だ。登降は問題ないが、事故が起きた時の対応、処理が絶望的、ちょっとしたことで行動不能もしくは帰ってこれない怖れもある。しかし、高所登山での他力本願は有り得ないし、個人の責任において行く遊びである。

もうひとつの問題は、私が隊長をしなければならないことだった。少人数の隊で、フィックスも張らない場合、隊長はほとんど雑用係みたいなものだが、それは隊の中の話で、どうも私は苦手である。だが、心良く隊長を引き受けてくれたにもかかわらず行けなくなった野沢井の事を思えばそんなことを言うてはいられない。

結局、2人でも行きたいという鈴木希望もあ

▼ラワルピンディーの街にて



り、難しいと言われている隊長変更をシルクロード社の督永さんをお願いし、ディラン隊も成立した。

なんということか、7000mの未踏ルートで、それも2人で順化トレーニングをすることになってしまった。酒のいきおいは恐い。

3人の時には今年のティリッチ・ミールのEXPをふまえ同じスタイルでと決まっていたが、2人となると少々計画の焼き直しをしなければならなかった。

東北の雪で鍛えられた鈴木は抜群の体力で、冬の壁にも出かけているようなので心強いが、私とは言えば体力、スピードともに自信がない。高所で自分がどの位動けるかは、2人とも酒を飲んでいない時にはわかっているつもりなのだが……。とにかく短期間でなおかつ安く頂に立つために基本方針を決めた。

①氷河上以外はなるべくザイルを結ばない。

(自分の手足で登降できない所にはなるべくルートを引きかない)

②ベースキャンプは低すぎるので(3480m)アドバンス・ベースキャンプを作り、そこで順化活動を行なう。

③個装は日本より、他の装備はシルクロード社からのレンタル、食糧はギルギットで調達する。(アタック用の食糧のみイスラマバード)

④イスラマバード～ギルギット間はローカルバスを利用。ギルギットからはジープをチャーターしてチラ村へ移動する。

⑤いつも悩みの種となるリエゾンオフィサーの支給品は、まずカトマンドゥに飛び、そこで調達し陸路でインド経由パキスタンに入国す

る。(実際には、シュラフ、ザック等をマジックマウンテン社の好意により戴くことができたので、直接イスラマバードに飛ぶことができた。)

★
計画概要

1. 隊の名称

チーム・ディラン1996

2. 主催

バーバリアンクラブ

3. 目的

ディラン峰の南面からの登頂
ムスターグ・アタ峰登山の為の高度順化トレーニング

4. 日程

1996年6月28日～8月15日

- 6月28日 成田発ーイスラマバード
- 7月6日 イスラマバードーギルギット
- 7月10日 ギルギットーディランカルカ
- 7月11日 ディランカルカーBC
- 7月12日
～ 登山期間(21日間)
- 8月1日
- 8月2日 BC撤収
- 8月4日 イスラマバード帰着

5. 現地連絡先

Silk Road Tour Service
H-I st.22 F7/2, Isulamabard Pakisutan.
P.O.Box 2253
TEL. 92-51-813725 FAX 92-51-272958

6. 隊の構成

隊長 岩崎 洋(36才)
隊員 鈴木正典(34才)
リエゾンオフィサー ラシード・ブット
コック イサ

★

野沢井、丸野の見送りを受け、前日から飲み続けの4人は成田でさらにビールを飲み、我々2人は、デューティーフリー・ショップでワインを買い機上の人となった。

5ヶ月ぶりのイスラマバードは例年と違って思った程暑くなく、北の方は天候不順で雪が降って

▼ギルギットの街にて



るという。早く入った隊は苦勞しているらしい。思わず暗くなってしまうが、天気だけは行ってみなければわからないのであまり気にしない事にする。リエゾンオフィサーが来る7月1日までは急ぐこともなく隊務をこなしていく。外国人登録を済ませ、ついでにリキュールパーミットを取る。これを取ると1ヶ月にビールなら120本、ハードリカーなら6本、ホテルで買うよりも安く買うことができる。デポ品の整理、テント、キッチン用品はシルクロード社の倉庫や台所を探して、4人分を揃えた。

食糧はギルギットで買う予定なので、それを入れる袋とケロシンコンロをラワルピンディーのラジャバザールに買いに行く。昔このオールドバザールに部屋を借りていたことがあり、とても懐かしい。埃と雑踏の中を汗をかきながら歩くのは楽しいものである。ただし急いでいる時は別だが。ナイフ、ケロシンコンロ、袋と麻紐等を買って早々に引上げる。今日は我々は忙しいのだ。

7月に入りリエゾンオフィサーと顔を合わせる。ラホールから来た若いパンジャブ人でパスー・ピークに登りに行っていたという。

最近、小さな登山隊には若い民間人のリエゾンオフィサーがつくことが多いような気がするが、我々としてはただ居るだけの人よりはちゃんと仕事をしてくれる人の方が良い訳で、これには運がともなうがこの差は大きい。

支給品については揉めたが、ひとつひとつ我々の装備を見せるとあまりのボロさに納得してくれたのだが、羽毛服だけは無ければ駄目だと言って聞かず、現金を払いそれでOKとなった。

4日、ブリーフィングを済ませてタクシーでバスターミナルへ向かう。16時発のバスに乗り込み一路ギルギットへ、16時間のバスの旅だ。1人180Rs×3+200Rsの荷物代、合計で740ルピー、ワゴンをチャーターすると思えば1/5以下の金額である。10年前と比べれば良いバスもたくさんあるので、ローカルバスで行くのもそんなに悪くはない。

★

早朝ギルギット着。予定していたホテルが閉っており、合流する筈の Cock もいなかった。少々困ったことになったが仕方ないのでフンザインに部屋をとり、イスラマバードに電話を入れるが Cock からの連絡は無いという。最悪来なくてもここは夏のギルギットだ、Cock ぐらい何人でも探ることが出来るだろう。とりあえずシャワーを浴びてウィスキーを一杯、明日一日で仕事は終るはずだ。合流出来なかった彼は昼過ぎにやって来た。ギルギット中のホテルを片っ端からたずね歩き、ここに辿り着いたという。フーシェ谷の出身で名前はイサ、中々律気な男でよく働き料理もうまかつ

た。ただ、米とダールと野菜ばかりであり腕がふるえず不満だったようだ。彼に明日一日で食料の買い出しをすることを告げ、分量を計算する。

米、ダール、野菜、砂糖、スパイス、紅茶等どこにでも売っているものばかりなので、半日で梱包まで終わってしまうが、ガスカートリッジを買って忘れてしまい、夕刻ローカルの人に再充填したものを1個US7\$で譲ってもらった。我々は6個買ったが結局2個しか使わなかった。再充填したものを高所で使うのは今いち不安だが仕方がない。チェックしてから使えば大丈夫だろう。探せば韓国製やオリジナルの新品が手に入ることもある。

チラ村までのジープは2台雇うことにした。全ての準備が終了後、リエゾンオフィサー、Cock を交え宴会をする。たまには彼らと世間話をするのもいいものである。ベースキャンプまでの2日間、何とか晴れてほしいものだ。ホロ酔い気分を外に出ると、空は満点の星、悪くはない。

21 NOV. 96 一つづー

ヒマラヤ名峰事典

Mountains of The Himalaya

薬師義美・雁部貞夫編／写真=藤田弘基

ヒマラヤ山脈の巨峰500座!
詳細な解説・登山史・山群地図・
大判写真で構成した
初の本格的な山名事典

好評発売中●定価10,300円(税込)

〒152 東京都目黒区碑文谷5-16-19
☎03-5721-1234/振替00180-0-29639

平凡社



全体を12の山域と41の山群に分け、各山群には詳細な地図を付し、ピークの位置、周辺の峠・氷河・谷などの地名と地形の特徴がひと目で分かるように構成。また、大型カメラを使った写真により、各ピークの山容・山姿を鮮明に識別できるようにした。山の項目数-510、写真(2色刷り)-330点、地図-60点、地名・人名索引約2000項目・内容紹介付き文献案内 四六倍判/上製/650ページ

巨峰500座——その山容と挑戦の歴史を一望できる

■ 寸感 ■

アンケート結果をみて、登山界が混沌としている様子がうかがわれる。登山界は社会一般の流れが最後に辿り着くところでもある。

政治・企業、官界が乱れに乱れている。登山の世界は一致団結して現在に合った組織を作らなければならないと痛感する。情報・共済……(山森)

事務局日誌(11月)

- 5日(火) 国際山岳連盟(UIAA)ディヴィス会長歓迎会(於:原宿 遠藤、山森)
- 7日(木) ヒマラヤ301号発送
- 8日(金) 中国登山研究会講師依頼発送
- 15日(金) 山学同志会創立40周年記念(於:平河町、遠藤、山森、八木原、尾形、中川)
- 16日(土) ~17日 クーラ・カンリ合宿(ルーム)
- 17日(日) 中国科学探検協会・周正副主席、西藏登山協会・高謀興秘書長と懇談(於:池袋 山森)

- 20日(木) プラブーツ懇談会(於:労山 山森、中川)
- 23日(土) ~24日 第10回東北地区海外登山研究会(於:青森県八戸市 山森、寺沢)
- 25日(月) 東京集会(15名)
- 27日(水) 「辺境の星」出版記念会(於:アジア会館 遠藤、山森)
- 28日(木) 中国登山協会/西藏登山協会代表団歓迎会(於:屋形船 遠藤、山森、八木原、尾形)

ヒマラヤ No.302 (1月号)

平成8年12月10日印刷 9年1月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

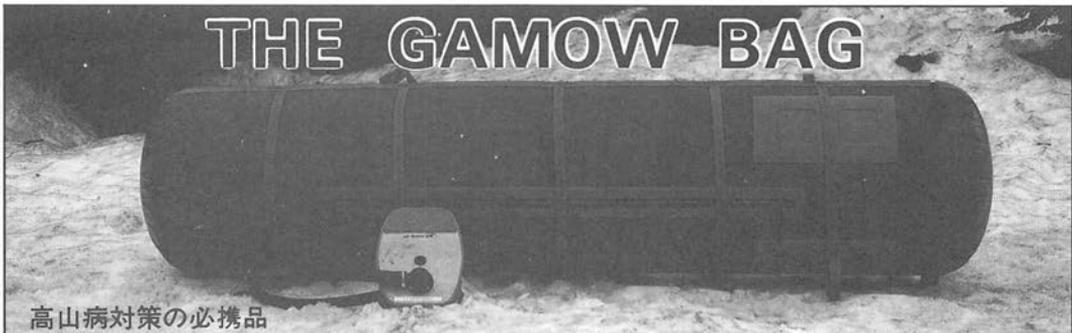
発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954 「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)
キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)
大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区福岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004